

## 俳句にとってリテラシーの獲得とは何か

——『ホトトギス』におけるリテラシー教育を中心に——

兎島 豊

### はじめに

ある人があるテキストを前にしたとき、これはたしかに「俳句」だ、と言えるのは何をもってだろうか。それはあくまで「俳句」に携わった者それぞれにとっての回答に過ぎないのでなかったか。言ってみれば「俳句」とは、読まれ作られる度に更新されてきた（更新されていく）何ものかの謂である。ならば「俳句」とは何かと問うとき、俳句表現そのものに着目するだけではなく、「俳句」を読んだり作ったりする行為の実態——いわば、俳句を読んだり作ったりするの目つきや手つきのありよう——にこそ注目する必要があるのではないだろうか。

いま「俳句を作り、読む力」を仮に俳句にとってのリテラシー（俳句リテラシー）とするならば、そうしたリテラシーはどのようにして獲得され、また、リテラシーの獲得は俳句史にとっていかなる意味を持つものなのであるうか。本論は、主として戦前における俳句雑誌『ホトトギス』及びその周辺で行われていた俳句リテラシー教育について論じることで、

こうした問いの一端を明らかにすることを目的とするものである。<sup>〔注1〕</sup>なお本論の主眼は、俳句に携わるといふ行為そのものに着目することによる「俳句」の問い直しというところにある。したがって本論では俳句リテラシーの具体像よりも、そうしたリテラシーを獲得する行為とその意味について重点的に述べることにする。

### 一 俳句初学者はどのようにしてリテラシーを身につけたか

俳句リテラシーを獲得する方法のひとつとして書籍を用いた独学が挙げられるが、子規は独学を試みる者に対して次のように述べている。

○問 俳句を学ばんとするには古人著書中初心に適する者何なりや。

答 初心に適する者として小学読本の如きは無し。（略）

初学者には類題の集こそ善かるべけれ。俳諧七部集、蕪村七部集、類題発句集、俳諧新選、題林発句集、新題林

発句集、三傑集、故人五百題等先づ読むべき書なり。各家の集も漸次に味ふべし。

ここで子規が薦めているのはいずれも句集の類である。一方、俳句入門書のような、より初学者向けの書籍も存在した。

◎第一問、余は俳句を独学せんとす、如何なる順序を以て独学せば善きや、又其に伴ふ良書あれば発行所と書名を御教へ被下度候。

答（略）俳句を学ぶに順序も何もいらぬ事なれど、強ひてそれ聞きたくば俳句入門、俳諧大要でも見るべし。

子規がここで挙げてゐる「俳句入門」とは、高浜虚子の『俳句入門』（少年園、明三二）のことであろう。明治三十一年に初版が発行された『俳句入門』は、日本派の俳人の手になる入門書としては最も早い時期に刊行されたもののひとつである。秋尾敏によれば、明治二〇年代には旧派の入門書が多数出版されており、そのような状況下にあつて『俳句入門』は虚子が自らの体験を踏まえつつ「写生」という概念を用いて俳句の作りかたを具体的に示した点が「画期的なことであつたはずだ」という。

明治二〇年代のみならず明治三〇年代に至つても、旧派の存在は依然として大きかつた。たとえば明治三十一年に『都新

聞』が行つた「俳諧十傑」のアンケート結果では上位四〇名のほとんどを旧派の俳人が占め、子規はようやく三七位に入つてゐる。また翌三二年に『太陽』が行つたアンケート「十二俳仙」でも旧派六名、新派六名が当選してゐるが、うち日本派の俳人は子規と内藤鳴雪の二名のみであつた。こうした状況を踏まえて改めて入門書出版の意義を考へてみると、そこには派の生き残りを賭けた戦略的な意図をうかがうことができそうである。虚子は『ホトトギス』創刊に際して次のように述べてゐる。

よし其の身は一堂に会せずとも紙上問ふべく教ゆべく論すべく駁すべく又互いに消息を通じ親交を暖むべし、庶幾くは地方は中央の墮落を警戒し、中央は地方の萎靡を鞭撻し互に補翼催進の功を奏すを得んか、

明治三〇年における虚子のこの言葉は、おそらく切実な思いをもつて発せられたものであつたらう。前述の状況を思うならば、ここで述べられてゐる「中央の墮落」や「地方の萎靡」は当時かなりのリアリティーをもつて書かれ、読まれていたはずである。こうした旧派有利の状況のなかで出された『俳句入門』、『俳諧大要』（ほととぎす発行所、明三二）であつてみれば、その出版に自派の俳句を広めようとする子規や虚子の戦略的意図が込められていたとしても不思議ではない。

だろう。

では、そうした俳句入門書は、実際にはどのように読まれていたのだろうか。

明治三五年一〇月、『ホトトギス』では「諸君は如何なる縁にて我新俳句を作り始めたるか」という題で文章を募集した。その結果を抜粋すると以下の通りである（投稿総数五五通。複数回答可）。「朋友に勧められたる者」 一〇人（二位）、「俳句入門」 二「俳句入門」を読んだのがきっかけ、という意味か——引用者注） 八人（四位）、「俳諧大要」 二「俳諧大要」を読んだのがきっかけ、という意味か——引用者注） 五人（五位）。

また昭和七年一月発行の『俳句講座』第三巻収録の「入門俳話」には、青木月斗が「ある二三の俳句会」で質問した結果が以下のように記されている。

第二問の入門書（諸君は如何なる入門書を読まれたか）という質問のこと——引用者注）には子規居士の、俳諧大要とか子規全集とか、子規居士のものが多し。次は虚子氏の入門書。鳴雪翁の入門書である。鼠骨、紅緑、瓊音、乙字、碧梧桐、井泉水、洒竹といふ名のももあつた。が入門書といふものを読まずとの答へが六七部通りであつた。印象に残つてゐる書中では、蕪村句集が一番多い。次が大祇、芭蕉、一茶、召波、几董、鬼貫の句集。

（略）句集を最も多く観て居り、俳論、俳話の書を見てゐる者が少数である事が解される。<sup>（注7）</sup>

月斗の記述にしたがうならば入門書はあまり読まれていなかったことになる。ならば初学者は、たとえば句集を読んだときすぐに内容を理解できるものだったのであろうか。熊倉玻窗は初めて『ホトトギス』を読んだときのことを回想して次のように書いている。

其後俳句を一句残らず読んで仕舞ふ迄には、幾日かを費した。俳句を読んでも、初めて聞く動植物の名が出て来たり、読めない字が多かつたり、たとへ読めても大部分は解からぬのが多くて、理解し得るのはその中の少しのものであつた。で今一度読みなほす事にして、今度は、解かる句には、赤い点を付けて行つた。あとで数へて見ると、赤い点は一頁の中にも数える程しか付いていないかつた。

玻窗はその後虚子の俳句入門書『俳句とはどんなものか』（実業之日本社、大正三）と『俳句の作りやう』（実業之日本社、大正三）を何度も読み、「赤い点が沢山並」ぶまでになつた。そして、友人の蕪州に誘われて初めて「柝の実句会」に参加した折には「すくなからず狼狽へた」ものの、「回を

重ぬるに随つて句作がすらすら出来るやうになつて来」た、という。

また清水不棲魚の場合は、同僚の小魚に『二萬句集』と虚子の『俳句入門』を借りたが、「句集を見ても妙味は勿論意味さへ解からないのが大半あつた」。その後小魚に二回ほど句稿を送つたが「何れも句らしいといふのは三十の中一二句しかなかつた」。

つまり破窗も不棲魚も初めは入門書を読んでも句作や俳句の解釈が上手くできず、周囲の人間に支えられながら俳句リテラシーを身につけていることがわかる。

ところで、月斗の質問には「諸君は、どんな動機で句を作り初めたか」というものもあり、その答として一番多いのが「友人、同窓、同僚から進められて句作に入つた」で、次に多いのが「祖父母、父母等が俳句又は和歌をやつてゐた感化」であつた。つまり、入門書を読む・読まないにかかわらず初学者はそのスタートの時点において多くの場合周囲に俳句に詳しい人物を持ち、手ほどきを受けていた可能性がある（この傾向は上掲の『ホトトギス』のアンケートで「朋友に勧められたる者」が二位になつてゐることと一致する）。とすれば、俳句初学者は句集や入門書を自力で理解したり俳句に関するリテラシーを完全に独学で身につけたりしたというよりは、むしろ破窗や不棲魚のように、周囲の人間に支えられながらリテラシーを身につけていったケースが珍しくな

つたと考えられる。

## 二 作句における他者の介在——選句について

俳句リテラシーを形成する際の他者との関わりのありようを考えると見落としてはならないのが句会である。句会の運座においてとりわけ重要視されたのは「選句」である。この「選句」こそ、俳句リテラシーの形成に関わるものとして、その大切さが語られてきたものであつた。

子規居士が明治の新俳句を提唱して以来今日まで我ホトトギス派では、俳句会を開けば必ず互選をやることにきまつてゐる。（略）まづ第一の意義は、お互に選句眼を養ふといふことである。（略）他人の句のよしわるし、がわからなくて、どうして自分の句を鑑別することが出来るかとも云ひ得る。（略）次に互選の意義は自分の句境を広めてゆく上に効果のあることであらう。<sup>（注9）</sup>

句会が互選という方法を採用する場合、参加者一人一人の選句が句会の成績に反映するのであるから、選句にはある程度の責任が伴う。しかし上記のごとく、俳人たちは選句にリテラシー教育の機能をも認めていた。したがって選句については次のような意見もありえた。

若し修行時代の人に選句の責を負わせたり、その選を目安にしたりする者があらば、それはそうする人の方がまちがって居るのです。修養時代の人は自分の信頼する先輩に自分の選句のしかたも見て貰ふつもりで、即ち句作と同じ心持でもっと活発にもっとほがらかに選をしなくてはいいけません。<sup>(注1)</sup>

選をすることによって参加者たちは句の良し悪しの判断基準を共有し、その共有された基準によって句を作り、そうして出来た句の選をすることによって他者と再び句の良し悪しの基準を共有する、という円環的なプロセスを踏んでいくことによってリテラシーを磨いていくのである。ただ、互選は行うのに時間を要するため多人数による句会には向かない。そこで句会が大規模になるにつれ、特定の参加者のみによる選句が行なわれるようになっていくのである。この風潮に対し、句会においてまさに「特定の参加者」になりやすい立場にあった虚子は次のように述べている。

さればと云つて、これを会衆中の少数の人の選句のみとして、「特選」とか称へて発表することを時々見受けることがあるが、私はこれを好まない。何処迄も平等に、形式的には誰にも重きを置くといふことなしに、互選を

するといふところに一種の面白い気分があるのである。<sup>(注2)</sup>

ここで虚子は句会における選句を互選に踏みとどまらせるための抵抗を見せている。しかし、『ホトトギス』において虚子が雑詠選者として、あるいは主宰として代表的論客として指導者の立場にあったにもかかわらず、互選において虚子の選句と無名の一句会参加者の選句とが同じ重さで受け取られたとは考えにくい。いや、「修行時代の人に選句の責を負わせたり、その選を目安にしたりする者があらば、それはそうする人の方がまちがって居る」という記述に即して考えるならば、句会には参照すべき指標のようなものが存在していることが想像されるのである。虚子の言うところの句会は参加者同士が平等な立場で句の良し悪しについての論議する場のことを指しているのであろう。しかし、たとえば次のような記述は、実際の句会においては論議の落としどころが決まっている場合があったことを思わせるのである。

虚子先生が出ておるでになる句会だと、実に安心して自分の思ふ存分の句を作つて出して、ひそかにその垂示<sup>(注3)</sup>を待つ心持でゐられる。

句会で披講の時、他の人の選に自分の句が入つても左程気持は動かない、最後に虚子先生選の披講となると全

神経を緊張さして傾聴する。<sup>(注14)</sup>

俳句の場合句会という場に限らず選者の權威が大きく、著名な俳人でさえ他者の選を経てから作品を発表することが珍しくなかった。それはたとえば次の例のように、俳句を作るとき他者の目による選抜を経なければその完成を周知することを憚るという俳句作者のあり方からうかがうことができる。

俳句の世界にのみは、選者制度という特殊な制度が、殆ど不文律の間に出て来て、昔から今日まで続いてゐる。昔の俳句作者も、今の俳句作者も大抵この制度に依つて自分の作品を公表してゐる。その選者である人でさへも、選者自身の作品を公表するのには、他の最も信頼すべき人<sup>(注15)</sup>に選を乞ふた上、初めて之を発表してゐる例も少くない。<sup>(注15)</sup>

また、新聞や雑誌の俳句欄に投稿する場合、選者の手で改作されたかたちで入選し発表されることもあつた。<sup>(注16)</sup>そのため、なかには選者制度の存在に対して作者としての主体性の危機を感じた中塚一碧楼のような俳人さえいたのである。<sup>(注17)</sup>ところで、句会にせよ新聞や雑誌に俳句を発表する場合にせよ、そこで選者によって問われるのは句の技術的な良し悪しに関するものであつて、それがそもそも「俳句」であるか

どうかということは問題にならない。松井利彦はこの点について次のように述べている。

「座」の文学と作句技術との関係について少し触れておくなら、「座」に連なる俳人、連衆にとって、その「座」は論議の場でなくて、直接作品を創り、作品そのもののは是非を判定する場として存在している。「俳句とは何か」とか「どのような傾向の俳句を作るか」ということを考える以前に、「どのようにして俳句を作るか」という、きわめて直接的な部分が出てくるのであつて、「俳句とは何か」「どのような傾向の俳句を作るか」といったことを考えるのは、作品をつくり、その傾向の俳句の実作が可能になつた段階でのその意味では高次の問題であり少くとも初心者にとって、あるいは新しく傾向を作るものにとつての俳論は、「座」の必須の要請として技術的に集約されてくるのである。<sup>(注18)</sup>

かつて「第二芸術」のなかで桑原武夫は水原秋桜子の「俳句のことは自身作句して見なければわからぬものである」という言葉をとりあげ「十分近代化しているとは思えぬ日本の小説家のうちにすら、「小説のことは小説を書いて見なければわからぬ」などといった者はいない」と嘆いたが、秋桜子の口からそのような言葉が出てきたのも、松井の指摘を踏ま

えるならば無理もないことであつた。<sup>(注19)</sup>つまり俳句に携わる者は、「俳句とは何か」という問いを立てる前に「俳句」を作つたのである。したがって、俳句リテラシーの形成を経てから理解されることになる「俳句」とは、自らが俳句リテラシーを身につける上で作ってきた、あるいはすでに読んできた「俳句」に他ならない。とすれば、「俳句」なるものの内実が変革する契機は、俳句リテラシーの獲得過程のただなかにこそ存在するのではないだろうか。そこで次節では、俳句リテラシーの獲得過程における「俳句」の変革について『ホトトギス』を例に考えてみたい。

### 三 俳句リテラシーの獲得過程と「俳句」の変革

『ホトトギス』には「地方俳句界」という投稿欄がある。これは、明治三〇年から三一年にかけて『ホトトギス』が松山で発行されていた際の通信欄に当たるものが東京で発行されるにあたり変化したものである。具体的には、各月に行われた句会の報告をそこで発表された句とともに送ってもらい、選句のうえ掲載する欄であつた。「地方」の一句会で発表される句の出来不出来までも選別することの意図のひとつは、「地方」の俳人への句作技術の指導にあつた。「地方俳句界」を見る限り、『ホトトギス』において「地方」の俳人は「東京」の俳人に指導される立場にある。「東京」と「地方」に

おける俳句にまつわる状況の相違について虚子は次のように述べている。

中央に在つて俳句を研究するものは俳句専門家に非ずとも他の文学に指を染むるもの多く、よし文学者に非ずとも常に文学者と交りて其の説を聞き、又自ら文学書を繙くもの、些くとも文学的俳句の真価値は充分認め居ることなれども、一度地方に至る時は親しく教を請はんに人無く自ら研究せんに書無く、見聞狭く、見識低く、殊に一方に月並の遺臭あり、不知不識の間に墮落し来つて終に第二の月並調たらざるを得ざるに至るべし、<sup>(注20)</sup>

このような状況において「地方」の俳句の作り手たちを指導するための手段となつたもののひとつが「地方俳句界」欄であつた。

ところで、こうした「地方」の俳人と「東京」の俳人とはお互いをどのようにまなざしていたのだろうか。

船河原町の発行所での発行所句会の日で暑い日であつた。その頃は地方の作家が此の句会に出席するのが流行してと云ふよりも、出席したことが一つの誇りとなるので、幾分かホトトギス地方俳句欄に句が出された地方の作家は、づぶん遠方から上京して、此の句会に出席され

た。雑詠に句が選出された一人の如きは「おれは何々県の用である、存在を認めよ」と許り、せまい句席の中央に岬の如く突き出て、大俳人の存在を主張する如く大あらをかき、その心持は都会者の我々にはよく判り、内心生意気な田舎者ぐらゐに思つて居たのであるから（以<sup>（注21）</sup>下略）

ここに書かれているのは、「地方俳句界」や「雑詠」に入選したことをもって自信とし、さらなる「誇り」を求めて有名俳人の出席する「都会」の句会に意気揚々と参加する「地方」の俳人の姿である。発行所で行われた句会の記事は「東京俳句界」欄などに掲載された。つまり発行所での句会への参加とは、文字通り「地方」から「東京」への越境を意味していたのであった。

一方、その「地方」の俳人に対する「都会者」の俳人のまなざしはどのようなものであったろうか。「その心持は都会者の我々にはよく判り、内心生意気な田舎者ぐらゐに思つて居たのであるから」と、「地方」俳人の「心持」を見透かし、「生意気」と評する態度——ここに、「地方」俳人を「東京」の俳人がどのように見ていたのかが象徴的に表わされている。つまり「東京」の俳人にとっては「東京」の下にこそ「地方」があるのである。それは『ホトトギス』の誌面からも視覚的に了解される。たとえば記事の順序として「東京俳句

界」欄の後ろに「地方俳句界」欄があるのであって、決してその逆ではない。また、「地方俳句界」において紹介される句会の順序も、都市部から地方へという一定の法則のもとに配列されている。「東京」の後進としての「地方」、という立場の逆転はありえなかつたかのようにみえる。しかしそれは本当だろうか。「地方」の俳人が提示した「俳句」は必ずしも「東京」のそのの焼き直しではなかつた。実はこの「指導者／被指導者」の関係のゆらぎのなかに「俳句」を変革する契機があつたのである。

都会の句は軽妙で功者で光沢がある代りに、空想的で浅薄で厭味がある。之に反して在所の句は鈍で粗暴で不細工である代りに写生的で変化があつて重みがあつて且材料に富んで居る。（略）併し僕は今大に之を喜ぶと同時に、早晚素朴な句風が都会化して来はすまいか、器用になりはすまいかといふ事が気になつてならぬ。地方俳句界の作者は此際グツト自重の態度を取つて貰ひたい。<sup>（注22）</sup>

「東京」在住の坂本四方太は「在所」の句について「写生的で変化があつて重みがあつて且材料に富んで居る」と評している。もっとも、そのような好意的な評価が、「在所」の句に対する「鈍で粗暴で不細工である」というまなざしゆえに保証されているものであることには注意すべきだろう。四



方太はまた前掲の文章において「元来僕は時勢に遅れてゐて標準が幼稚なせいかわらんが」と屈折した表現を用いながら「東京俳句界や募集俳句などよりも遙に旨いと感じた」とも述べている。

虚子はこの文章を受けて次のように言う。

其田舎臭味即流行の外に立つてゐるといふ事、空想の句でなくて写生の句であるといふ事などは誤りの無い事実である。いいかへると地方俳句界の句は下手な句が多いのだ。(注23)

「下手」である、しかし同時に「田舎臭味即流行の外に立つてゐる」という強味がある——虚子はこのような評価によって「地方」の句を引っ張りあげてくる。四方太も虚子も決して手放して地方の句を褒めているわけではない。しかし両者は「下手」で「不細工」な「地方」の句に、「巧者」な「都会の句」のマンネリ化を打ち破る可能性を見ていた。実際、「地方俳句界」の選者をしていた虚子は、「地方俳句界」に送られてきた「下手」な句を参照し改作することによって新しい一句を生み出そうとさえしているのである。換言すればそれは、俳句リテラシーの獲得過程において、初学者にとつていまだ不確かな「俳句」なるものが作品として具体化されたとき、その作品が指導者にとつてすでに明確であるところ

の「俳句」から引き出されてくるはずの作品（同時に、指導者が自らの俳句リテラシーを獲得する過程で作り、読んできた作品）と衝突することによって新たな「俳句」の地平を切り開いた瞬間であった。

一寸見るとひどい句が並んでゐるやうであるが、どこかに又斬新なところがある。仰山にいへば新生気のあるやつがある。調子のまづいのは何とか一寸直せばよし、配合物の悪いのは切り除けて他のものを継ぎ足せばよし、中には前の句の前半を後の句の後半に継ぎ足して思はぬ斬新な奇抜な句を得る事などもある。(注24)

このように俳句リテラシーの獲得過程には、多様な作品が互いを揺さぶり合うことによって新たな「俳句」が生まれる瞬間が潜んでいたのである。

#### 四 新たな俳句史の構築へ向けて

本論では人が学習者として俳句と関係を結ぼうとするときに生じる俳句リテラシーの獲得という事態がいかなるものであるのかということを検討してきた。そこで見えてきたのは、他者との繋がりゆかりのなかに身を置くことで「俳句とは何か」という問いを先延ばししながらテキストと対峙する者の姿であった。そのことの是非についてはここでは問わない。重要な

のは、俳句がそのようなものでもあったのだということであり、人と俳句との多様な関係性に着目することで「俳句史」を問い直すべく試みることにある。

これまでの俳句史は、俳句表現や俳人たちの動向に着目して記述されてきた。そのまなざしは俳句表現史や俳壇史として結果した。俳句表現史も俳壇史も「俳句」を「史」として紡ぎだす方法としてそれぞれに正当であるにちがいない。だが俳句に携わる者は、そのすべてが俳句表現の更新に参加しようとする者ではないし、そのすべてが俳人なのでもない。俳句との関係のとり方はもっとずっと多様なはずであり、とすれば、そうした多様な関係のとり方に着目することを通して俳句をとらえていく必要がある。つまり、「俳句」の総体をとらえようとするならば、人が俳句に関係するときそこで何が起こっていたのかを検討する作業が要請されるはずである。

## 注

(1) 本論では俳壇における俳句リテラシー教育について、戦前の『ホトトギス』とその周辺において行われたそれをサンプルとして論じる。それは、高柳重信が「新興俳句運動概観」(村野四郎ほか編『講座日本現代詩史』第三卷、右文書院、昭和四八)で述べたように、戦前「俳壇は即「ホトトギス」という状況にあり、他のコミュニティにおいて行われた俳句リテラシー教育の例を用いて論じるよりも比較的蓋然性を有

すると判断したためである。したがって本論で述べた内容はあくまで一例に過ぎず、今後は他のコミュニティの場合との比較検討が必要である。

(2) 正岡子規「俳句問答」(『日本』明治一九・七・二九)。なお、子規は「或問」(『ホトトギス』明治三一・一六)においても同様に、「俳書はいかなる書をば読むべきか」という問いに対して芭蕉七部集や蕪村七部集、あるいは種々の家集を薦めている。

(3) 傍点原文。正岡子規「随問随答」(『ホトトギス』明治三三・一一)。

(4) 秋尾敏「虚子とホトトギス——近代俳句のメディア」(八)『俳句入門』と写生」(『俳壇』平成二五・八)。

(5) 「俳諧十傑」(『都新聞』明治三一・三・五)。「十二俳仙」(『太陽』明治三一・一六)。

(6) 虚子「俳連」(『ホトトギス』(明治三〇・四)。

(7) 青木月斗「入門俳話」(『俳句講座』第三卷、改造社、昭和七・一一)。

(8) 熊倉坡窗「その前後の事ども」(『ホトトギス』大正七・一一)。

(9) 清水不棲魚「歩み」(『ホトトギス』大正六・一一)。

(10) 傍点原文。泊月「俳句会の互選」(『ホトトギス』大正二二・一一)。

(11) 矢田挿雲「選句に怯なる勿れ」(『俳句と添削』大正二二・八)。

(12) 虚子「消息」(『ホトトギス』昭和二・一〇)。

(13) 田中王城「いろいろな立場から見た俳句」(『ホトトギス』

- 昭和一四・五)。
- (14) 鈴木花蓑「いろいろな立場から見た俳句」(『ホトトギス』昭和一四・五)。
- (15) 杉浦冷石「俳句の選者制度に就て」(『枯野』大正二二・七)。
- (16) たとえば室積徂春「俳壇月評」(『枯野』大正二二・八)には次のようにある。「ホトトギス七月号には、虚子選雜詠三百八十九句の中、約一割の三十九句が添削若しくは訂正されて、一々原句を挙げて発表してある」。
- (17) 瓜生敏一「第二次早稲田遊学」(『中塚一碧楼 俳句と恋に賭けた前半生』桜楓社、昭和六一・一)。
- (18) 松井利彦「解説」(『定本高浜虚子全集』第十卷、毎日新聞社、昭和四九・二)。
- (19) 桑原武夫「第二芸術——現代俳句について——」(『世界』昭和二二・九)。
- (20) 虚子「俳運」(『ホトトギス』明治三〇・四)。
- (21) 前田普羅「運座」(『俳句』昭和二七・七)。
- (22) 坂本四方太「地方俳句界を読む」(『ホトトギス』明治三六・六)。
- (23) 高浜虚子「地方俳句界に就て」(『ホトトギス』明治三六・六)。
- (24) 同前。

(こじま・ゆたか／早稲田大学大学院)